

Title	Antonio de Nebrija : 『カステイリア語文法』(翻訳-1)
Author(s)	Nebrija, Antonio de; 中岡, 省治
Citation	大阪外国語大学学報. 70(1) p.87-p.105
Issue Date	1985-11-30
oaire:version	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/81064">https://hdl.handle.net/11094/81064</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

# Antonio de Nebrija

## 『カスティリア語文法』(翻訳-1)

中 岡 省 治

Antonio de Nebrija

*Gramática de la lengua castellana* (traducción)

Shoji NAKAOKA

Antonio de Nebrija es una de las figuras más importantes en la historia de la lengua española, humanista por excelencia de quien la España Renacentista pudo enorgullecerse ante todos los países de Europa que comenzaban a tener una apremiante necesidad de conseguir la carta de naturaleza para sus respectivas lenguas nacionales.

En aquellos tiempos ya era el castellano la lengua “vulgar” más influyente en la Península Ibérica y estaba casi consolidado como un ente lingüístico provisto de pautas legitimadas que podrían constituir las de toda lengua culta literaria de la Edad Moderna. La *Gramática* de Nebrija marca el punto de partida de la posterior sistematización del idioma.

Quizá antes de Nebrija nadie pensara en la necesidad de una gramática para las lenguas vulgares, hasta entonces privativa de las clásicas, por lo que su intento de dar una gramática a la lengua vulgar podía calificarse, a juicio del convencionalismo de la época, como una clara contradicción de términos. A pesar de todo ello, su noble motivo lo justificó todo y apareció la *Gramática* como la primera de la lengua castellana y primera también entre las gramáticas románicas, a las que les serviría de pauta.

A continuación aparece una traducción parcial de la misma obra, que, pese a su trascendental valor para el estudio de la lengua española, quedaba, a mi entender, sin ser traducida al japonés, lo que me ha movido a imponerme con mucha timidez esta difícilísima tarea.

アントニオ・デ・ネブリハ著

『カスティリア語文法』（訳註）

中 岡 省 治

アントニオ・デ・ネブリハ (Antonio de Nebrija) は、1444年に、現在の Sevilla 県 Lebrija に生れた。若くして勉学の意気に燃え Salamanca に出、その後十九才で、当時、イタリアのボローニャ大学に付設されていた、聖クレメンテ派のイスパニア学院に赴き、ここで十年間、古典研究に従事した。学成りて後、彼はイスパニアに帰り、Sevilla 大司教 Alonzo de Fonseca 師などの援助の許、研究を行なうと同時に、1475年には Salamanca 大学に招聘され、文法と修辞学の授業を担当することになった。ネブリハは、それまでイスパニアで行なわれていたラテン語教育に飽き足らず、イタリア人学者ヴァツラの方法論に拠って、それを改革しようと試み、*Introductiones latinae* を書き、これを Salamanca で1481年に出版した。これは彼の最初の著作であると同時に、イスパニアの古典研究史上、一時代を画する書物ともなり、またたく間に初版千部が絶版となったので、翌年には、第二版を発行する程であり、この著述によって、ネブリハの名は大いに高まった。彼のこの *Introductiones* は、それ以後のラテン語教育のための教科書として、イスパニアのみならず、イタリア、フランスでも重用された、といわれている。

しかし、ネブリハのもう一つの意義は、以下に訳出する *Gramática de la lengua castellana* 『カスティリア語文法』にある、といえる。1492年8月3日、時の国王、イサベル一世に献げられたこの『カスティリア語文法』は、いわゆる“俗語”文法としては初めてのもので、人が生得のものとして持っている母語を尊重しこれを称揚せんとした、ルネッサンスの精神を体現したものの、と考えられる。いうまでもないことだが、“文法”(Grammatica=文字術)は、当時は、文語、学術語にのみ適用しうる“技法”(Arte)であって、日常語としての俗語とは無縁のもの、と見做されていた。しかし、ネブリハはこの固定観念を打ち破って、ラテン語文法の一般的な枠組みを、俗語カスティリア語の体系化のために援用し、見事に成功したのである。古典語学者としてのネブリハは、数多くの言語の滅亡の過程を目のあたりにし、国家の消長とその言語の消長とがいかに密接に関係しているかを痛感したにちがいない。そこで、それまでは何の規範、規則の制約を受けることなく用いられてきたカスティリア語を、「技法にまとめ (reducir en artificio)」、これによって、ここに、統一の成ったイスパニア国の国語に相応しい意義付けを行なったのである。ネブリハの『カスティリア語文法』を嚆矢として、次々にカスティリア語研究書が刊行され、彼の意図は、18世紀初頭の Real Academia Española の成立となって、受け継がれてゆくといえよう。

なお、この翻訳にあたって用いたテキストは、Antonio de Nebrija, *Gramática de la lengua*

*castellana*, estudio y edición de Antonio Quilis, Editora Nacional, Madrid, 1980 であり、同時に, Antonio de Nebrija, *Gramática castellana*, texto establecido sobre la ed. 《princeps》 de 1492 por P. Galindo Romeo y L. Ortiz Muñoz, Madrid, 1946 を適時参照した。

## 目 次

### 序 言

1. 第一巻. 正書法を取り扱うの巻.
2. 第二巻. 音律と音節を取り扱うの巻.
3. 第三巻. 語源と単語についての巻.
4. 第四巻. 構文と十品詞の配置についての巻.
5. 第五巻. カスティリア語を学ばんとする外国人へのカスティリア語手引の巻.

### 序 言

崇高にして聡明なる女王イサベル陛下、史上この名を有せる第三の女帝、イスパニア及び我らが海に在る島々の女王にして、天の定める支配者に捧ぐ。ここに教師アントニオ・デ・レブリハがカスティリア語につき新たに編纂したる文法書を始めるにあたり、まずはその序文を記す。心して読まれんことを願う。

聡明なる女王陛下様、私は、我らの思い出と記憶に在らんことを願い、書き残されたるすべての記録の古きを思い、これを目前に致しますに、疑う余地なき結論として、言語は帝国の朋友であること、またかくの如く朋友であったが故に、両者同時に勃り、成長し、繁栄し、また両者の没落も時を同じくした、ということ、確信を以て申し上げるのであります。さて、アッシリア人、インド人、シシオン人<sup>1)</sup> やエジプト人に関するもののよう、その真実の程については姿や影だに想像しえぬ、太古の事柄は今ではさて置き、私は最も新らしき出来事、特に、我々が一層確信をもちうるもののうち、まずはユダヤ人につき申し上げたく存じます。これ実に簡単に確認しうることでありますが、その言語ヘブライ語には幼少期があり、この段階では、ヘブライ語は、語ることも殆んど不可能でありました。私が今ここでその幼少期と呼んだのは、ユダヤ人がエジプトの地に居た時期全体を指してのこととあります。かく申しますのは、ユダヤ人の族長たちは、エジプトに流れ行くまでは、アブラハム<sup>2)</sup> がカルデア人<sup>3)</sup> の土地から持ち来たるあの言語を使っていたことと、エジプトにおいてその言語の一部を失なうも、この地の言語の一部を、自分たちのものに混淆させて用いたことは、これ真実、いやほぼ真実に近きことと見做せるからなのであります。しかるに、彼らがエジプトを出て、彼ら自身が民族集団となるに及んで、私の考えますところ、カルデア人やエジプト人の言語と、この二民族が相互理解のために保持していた言語から作り上げた、彼ら自身の言語をも、徐々に孤立させてゆくことになるのでありますが、これは

彼らユダヤ人が移り住んだ土地の主たる異民族と、その信仰の面で全く違っていたことにも起因いたします。かくして、モーゼ<sup>4)</sup>の時代にヘブライ語が華と咲き始めるのであります。このモーゼたる人、エジプト諸賢者の哲学、文学を深く修めて後、神と語り、己が民族の事蹟をも伝えるに相応しき資格を備えたる人、ユダヤ人の古の事蹟を記録し、ヘブライ語の端を開き先達でもありました。これ以降というもの、ヘブライ語はそれに並ぶものなき発展を遂げ、ソロモン王<sup>5)</sup>の時代にはその絶頂期を迎えるのであります。このソロモン王は平和の世の具現者として、その王制の許、泰平の華が咲き、優れて賞賛すべき諸学芸を生み出したのであります。しかるに、ユダヤ人の王国が分裂し始めるに及んで、同時にその言語も力を減じ始め、ついにこれは、現在我々の目にする状態に立ち至り、かく衰微したるがため、今日生あるユダヤ人は誰もが、己の信仰を説く言語に関しては、その王国を如何にして失なったかということ、ただ徒に待ち望む救世主のことしか、語りえなくなっております。

同様に、ギリシア語にも幼少期がありましたが、その後、トロイ戦争のしばらく前から、このギリシア語も力を蓄え始め、音楽と詩の分野でオルペウス<sup>6)</sup>、リノス<sup>7)</sup>、ムサイオス<sup>8)</sup>、アムピオン<sup>9)</sup>が華々しく登場し、トロイの破壊の少し後に、ホメロス<sup>10)</sup>やヘシオドス<sup>11)</sup>が活躍するのであります。かくしてギリシア語は成長を続け、アレキサンダー大王の世に至り、この時代にかの多数の詩人、雄弁家、哲学者が出現し、彼らはこぞって、ギリシア語のみならず、他のすべての技芸や学術をその極みにまで引き上げたのであります。しかるに、ギリシアの諸王国と共和国とが分裂し始めて後は、またローマ人がギリシアを己がものとした後には、ギリシア語が衰微し始めるのと、ラテン語が勢をうるのとは同時でありました。このラテン語についても重ねて同じことをいいうるのであります。即ち、ラテン語の幼少期はローマの誕生と植民の時代であり、ローマ建設の後、リビウス・アンドロニクス<sup>12)</sup>が、ラテン語の韻文による彼の作品を始めて出版するのを契機とし、以後、約五百年に亘りその華を咲かせるのであります。かくしてラテン語は、アウグスト大帝<sup>13)</sup>の時代まで発展してゆきますが、時ここに至り、使徒聖パウロ<sup>14)</sup>が述べた、「神がその子キリストを遣わされるという予言の時が到来」したのであります。ここに世界は救世主の誕生をみたのであります。これ正しく、予言者たちが予言し、ソロモン王の出現により具現化された平和の時代であり、その誕生を祝し天使たちが、「天上界にありては神に栄光あれ、地上にては心根良き人に平和あれ」と歌い上げたる平和の時代でありました。この時代はまた、かの多くの詩人や雄弁家たちが、後の我々が時代にラテン語の写本や心楽しき作品を伝え残したときでもありました。これ、トゥリウス<sup>15)</sup>、カエサル、ルクレティウス<sup>16)</sup>、ベルギリウス<sup>17)</sup>、ホラティウス<sup>18)</sup>、オビディウス<sup>19)</sup>、リビウス<sup>20)</sup>であり、またアントニヌス・ピウス<sup>21)</sup>の時代まで、次々と輩出したその他多くの文人であります。しかし、このアントニヌス・ピウスの時代以降、ローマ帝国は衰微し始め、これと期を一にしてラテン語も衰え始め、ついには、ラテン語は我々が親たちから受け継いだ、あの状態に陥ってしまったのであります。現状は、かの華かなりし時代と比べるに、その勢はアラビア語と大差なきもの、といえましょう。これまでヘブライ語、ギリシ

ア語とラテン語につき申しましたことを、より明確に、カスティリア語について言明しうるのであります。つまり、カスティリア語は、その幼少期を、カスティリアとレオンが執政官と国王とを戴ける時代に有し、聡明にして永遠の名を冠せらるべき国王、アルフォンソ賢王陛下<sup>22)</sup>の治世下にその力を示し始め、このアルフォンソ陛下の命により、『七部法典』及び『歴史通鑑』が編まれ、ラテン語やアラビア語による多数の書物が、我らのカスティリア語に翻訳されたのであります。このカスティリア語は、その後、アラゴン、ナバラにまで広まり、その地からイタリアへと、我が国がイタリアの諸王国を治めるために派遣した歩兵部隊に付き従い、伝わりました。かくの如くカスティリア語は、まずは神の御心と御摂理とにより、次いで女王陛下、殿下のご精励、刻苦、辛勞の賜物として、今日我々の享受する王朝と平和の御世まで発展してきたのであります。女王陛下に備わりし強運と好運の許、かつては各地に四散したるイスパニアの諸州、諸地域も、今は統合、合体し、統一体をとる王国となりましたが、かくの如く整備されたるこの王国の枠組と絆とは、今後何世紀の経過にも、誹謗にもまた逆境にも耐え、破れ壊れることなきものと存じます。したがって、我々を神の下僕とする絆たるキリスト教を再度浄化し、神に帰依したるこの今には、我らの信仰の敵が戦と武器の力によりて制圧されたるこの今には、カスティリア王国にして共和国と称される、この偉大なる結社の中で、我々をまとめ、平等に生活することを保証する、諸法の正義と運用とが成ったこの今には、残ることはただひとつ、平和時の学芸の華を咲かせることなのであります。このうちまず最初に取り上げるべきものとして、言語教授の法がございます。言語とは、私たちをすべての動物から弁別する人間固有のものであり、従って、悟性のなすべき働きである思考の次に位置するもの、といえるのであります。この我々が言語は、現代までは己が自由に、規則に縛られることなく歩んできたがため、僅か数世紀の間に、多大の変化を蒙りました。といいますのも、もし今日のカスティリア語と五百年前のものとを比較しますに、異質の二言語間に生じうるともいえそうな、そんなにも大きな差異、変様がみられるからであります。加うるに、私の意図と願いととは、他でもない、我が国の万物を称揚すること、私と言語を同じくする人々が、山なす嘘と間違いとに包み込まれた小説、物語などを読んで、今その余暇を費やすよりも、万人にそれを善用するための手だてとなりうる書物を提供することであり、そこで私は、まずは最初にこの我々のことば、カスティリア語を技法<sup>23)</sup>にまとめ上げ、こうして、今そしてまた今後、カスティリア語で書かれるものが、ひとつのまとまりを呈し、ギリシア語やことラテン語にて成就された如く、来るべき時代の永遠の長きに亘り、理解されるものとならんを願うのであります。定かな規則の下に存在したが故に、幾世紀を経た後の今日でもなお立派に統一を保っている、ギリシア語やラテン語のように、かく申しますのも、ギリシア語やラテン語の場合と同じ措置が、我々が言語においてなされなかったならば、陛下に仕える年代記作家や歴史家が、いかに殿下の称賛すべきご偉業の記録を書き著し、これを不滅のものとせんと試みても、また我々が、カスティリア語で、他国の変わったことごとを翻訳しようと努めてみても、これすべて無益なことになってしまうからで、これ正しく、それらの記録が安住しうる住み家を持たない

がため、といえるのであります。従って、ここでは、次の二者のうち、一つを選ぶ必要が生じて参ります。即ち、陛下のご偉業についての記憶が、言語と共に潰えるがままに任すのか、それとも、安住すべき己が館を持たぬがため、他の国々を放浪し歩くがままに任すのか、のいずれかを。そこで私はカスティリア語安住のための館、建築のための土台に最初の礎石を据えて、カスティリア語に対し、ゼノドトス<sup>24)</sup>がギリシア語の中で、クラテス<sup>25)</sup>がラテン語の中でなしたことを、行ないたく思った次第であります。この二人の学者は、後世彼らについて書き著したる人々によって批判、攻撃されはしましたが、少なくとも彼らの名誉は揺るぎなきものであり、これと同様、今後、いつの日か必要欠くべからざる書物の最初の立案者として、我らが名誉も高まることでありましょう。この仕事を我々は未だかつてなき最良の時代に行なったと申せますが、これは、我が国の言語が今やその頂点に登りつめ、これ以上の浮揚を期待するよりも、その退潮を危惧するところの方が大きいからであります。次いでは、今述べたことにも劣らぬ効果が、カスティリア語を母語としラテン語を学ばんとする人にも、及ぶと考えられます。と申しますのは、彼らがカスティリア語の文法を体得するのは、日頃なれ親しんだことばであるが故、何らむづかしいことはありませんが、これを終えて後、ラテン語の学習に移ったときにも、陛下の命により私が編纂いたしましたこの『文法技法』<sup>26)</sup>を頻に参照し、ロマンセたるカスティリア語とラテン語とを一行ずつ対照させてゆけば、彼ら学習者の理解の及ばぬような難問など見当らなくなる、と思われるからであります。このような学習法によれば、何ヶ月はおろか僅か何日かで、これまで長年をかけて習ったものよりももっと充実した形で、ラテン語文法を習得出来る、としても何ら不思議ではありません。私のこの書物のもつ第三番目の利点は次のことかと存じます。私がサラマンカで、陛下にこの書物の見本刷りを献呈いたしましたとき、陛下が、この書物がどのような役に立つのか、と私にお尋ねになったとき、アビラ司教様<sup>27)</sup>が私の返事を遮って、私に代ってこう申されたのであります。「女王陛下が、そのご統治下に、多数の蛮族や言語を異にする国々を従えられたとき、戦に敗れたそれらの民族、国々は、勝者が敗者に課す法律を受け入れ、これと共に我らが言語をも受け入れる必要に迫られるとき、そのときこそ、この彼の著しましたる『技法』によって、それらの被征服者たちは、我らが言語を習得出来るようになるであります。これ現在、我々がラテン語を習得するため、ラテン語文法技法を習うのと同じことであります」と。このことば、正に至言であり、我らの信仰の敵も、今やカスティリア語を知る必要に迫られ、かたや、ビスカヤ人、ナバラ人、フランス人、イタリア人、その他イスパニアにおいて何らかの交渉、対話を行なうがため、我らが言語を必要とする人々も、幼児の頃からそれを日常の使用を介して習得するのでない場合、この書物によって、簡単に、カスティリア語を覚えられることでありましょう。従って、ここに私は、羞恥、畏敬、畏怖をもって、本書を女王陛下様に献呈申し上げます。かつてマルクス・バテロ<sup>28)</sup>がマルクス・トゥリウス<sup>29)</sup>にその著書『ラテン語の起源』を捧げ、グリリウス<sup>30)</sup>が詩人プブリウス・ベルギリウスにその著『韻律に関する書』を捧げ、法王ダマソが聖ジェローム<sup>31)</sup>にその書を捧げ、パウルス・オロシウス<sup>32)</sup>が聖アウグスティヌス<sup>33)</sup>にその『歴史の

書』を捧げたことに倣うものであります。加えてその他の多くの著述家も、己の努力と労苦とを、傾け、各自が論述している事柄に造詣の深い人々に近ずかんとしたのでありますが、これは先達に、その不明なる点を知らしめるためではなく、彼らに対して抱きし敬愛と敬意の証しとを表わし、彼らの権威から、何らかの恩恵を蒙ったことに対する謝意の表明でもあったのでした。よって、私は今ここに、多くの人が私に対し抱いている猜疑の数々をも願りみず、私のこの新しき書物を因襲的な暗霧と暗黒の中から、陛下の宮廷の光明の中に披露することを決意するにあたり、この私の著述を捧げうるのに万々の理由のある方としては、その手中、権限に、国語の命運のみならず、我らが国の政すべての裁量権を有される女王陛下をおいて余人はなし、と考えたのでございます。

## 第一巻 正書法を取り扱うの巻

### 第一章 文法を区分し諸部分となす

ギリシア語からラテン語に gramática なる名詞を翻訳した人は、文字に関する技法のことをこの単語を以て呼び、その技法の教授者及び教師を gramáticos といったが、これは、我々の言語では letrados (文字学者)<sup>34)</sup> といっていい。この gramática なる概念は、キンティリアヌスの考えによれば、二つに分割される。まず最初の部分は、ギリシア人が methódica と呼んだ分野で、これを我々は doctrinal (規則集)<sup>35)</sup> と言い換えることが出来るが、この訳語は、ここが文法技法の決まりと規則とを扱う分野だからである。文法技法は、用法を作り出すに値する、権威ある人々の慣用から成立していて、併せて、慣用そのものが、無知がため混乱するのを食い止める働きをもする。第二の部分は、ギリシア人が istórica と呼んだもので、これを我々は declaradora (解説部)<sup>36)</sup> と言い換えうるが、これは、この部分が、我々が以後、手本、典拠とすべき詩人や諸作家についての説明、解説を行なうための箇所となるからである。doctrinal と呼んだ部分は四項目に分割される。その最初はギリシア人が orthographía と呼んだもので、我々はこれをローマの言語で sciencia de bien y derechamente escribir (正しくしかも決った通りに書き綴るための術)と名付けうる。ここには、他ならぬ文字の数とその声の強さとを知ること、どんな形に単語や品詞を書き表わすべきかを知ること、とが該当する。第二はギリシア人が prosodia と呼んだもので、我々はこれを acento (アクセント)と、もっと正確に言えば, canto (音調)と解釈できる。これは、単語や品詞の音節の一つ一つを、揚げ下げするための原理である。この分野に正しく、詩や歌を読み、その脚韻の重さと適正さとを測るための原理が含まれる。第三はギリシア人が etimología と呼ぶもので、キケロはこれを anotación (註釈)<sup>37)</sup> と解釈した。我々はこれを、単語の実の姿と名付けることができる。これは、後にみるが、カスティリア語には十種類ある品詞夫々の意味と語尾変化とを考察する分野である。第四番目はギリシア人が syntaxis と呼び、ラテン人が construcción (構造) と呼んだもので、我々はこれを orden (語順) と呼ぶことが出来



る。ここに該当するのは、単語や品詞相互間の配置の考察である。従って、我らが書物の第一巻は「正書法と文字」、第二部は「音律論と音節」、第三部は「語源論と単語」、第四部は「構文論、即ち、品詞の接続と配置」とから成る。

## 第二章 文字の最初の発明とそれがどの地からイスパニアに到来したかについて

人が経験によって見出した事物、神の啓示により人間の生活を磨き、飾り付けるために我々に示されたあらゆる事物の中で、文字の発明ほどに必要度が高く、我々に大なる便益をもたらしたものはない。この文字は、全ての国々の是認と黙契により受け入れられることになったが、古代につき書を著した人々は、ヘリウス<sup>387</sup>を除いてみなが、文字はアッシリア人の創案になるものと考えている。かたやヘリウスは、文字の発明者をエジプトのメルクリウス<sup>389</sup>だとし、また他ならぬこのエジプトの地では、アンティクリイデス<sup>400</sup>がメノン<sup>411</sup>の名を挙げ、フォロネオ<sup>422</sup>がアルゴスに王として君臨する十五年前に、つまり族長アブラハムになされた再約束の後百二十余年に当たる時代に、彼メノンが使い始めた、としている。文字の創案はアッシリア人の手になる、という人々の中にも大きな見解の違いがある。ギリシア人の中でも最も真摯な著述家のエピヘネス<sup>432</sup>、彼に倣ったクリトデモ<sup>442</sup>とペロソ<sup>450</sup>とは、文字の創始者をバビロニア人とし、その時は、彼らの記述によれば、アブラハムの誕生よりもずっと前となる。我が国の著述家は、我らが信仰に組みするところから、この創始者の名誉をユダヤ人に与えている。但し、これら創始者とされる人々の間に流布した文字で最古のものは、モーゼの時代のもので、この時期にはすでにエジプトでは、初めの頃のような動物の形ではなく、直線と折れ線による文字が盛んとなっていた。他のすべての著述家は、文字の創始をフェニキア人の手によるものとしているが、このフェニキア人は、文字以外に、石を四角に切り出すこと、塔を建立すること、金属の鋳造、ガラス器の製造、星を目印としての航海、鉄法螺貝の精と血とを用いての紅絹の染色、ホアン・デ・メナ<sup>460</sup>が間違っマジョルカ島民のものとみた石投げ道具と石投げ縄の考案者でもあった。したがって、ユダヤ人は、隣接の地の住民として、彼らと国境を接し、これを分ち合っていたフェニキア人から、文字を受け入れたのかもしれないし、あるいは、あの天と地の創造を語る書が記録している飢饉を逃れて、ヤコブ<sup>470</sup>がその子らとエジプトに逃れた後の時代に、エジプト人からそれを受け入れたのかもしれない、と考えられる。私には後者がより確実だと思えるが、これは、ギリシア人では「歴史の父」ヘロドトス<sup>480</sup>が、ラテン人ではポンポニウス・メラ<sup>490</sup>が、エジプト人はその文字を逆さにして使う、と書いていることから証明されるし、また今では、ユダヤ人が同じ書き方をしているのを、我々は見ることが出来るのである。また、エピヘネス、クリトデモとペロソの書いていることが正しければ、文字発祥の地はバビロニアになる。これらの作家の挙げている時代を勘案すると、文字はアブラハムが、神の命によりカルデア人の地を去って、カナン<sup>500</sup>の地に来たときに、もたらされたのかもしれないし、あるいはその後、ヤコブがメソポタミアに帰り、その舅、ラバン<sup>510</sup>に仕えたときに伝えられたのかもしれない。

しかし、このように文字の最初の創始者は誰か、については定かな説はないが、著述家の間では、アゲノールの息子カドモ<sup>52)</sup>が、文字をフェニキアからギリシアに伝えたということが定説となっている。これは彼が、ジュピターが奪い去った妹のエウローペを捜し出すよう、父から任を受け、ボエキアに到り、そこのテーベの都に居を構えたときのこと、となるようだ。こういう訳で、ギリシアからそれをイタリアへ、ニコストラタが伝えたことには疑の余地はない。彼女はラテン人からはカルメンティス<sup>53)</sup>と呼ばれた人で、彼女の息子エバンドロが己に課したる流刑に付き添い、アルカディアから現在ローマが建設されて在る地に赴き、後にローマの王にして皇帝の宮殿となる、パラティヌス山の一都市に住んだ人である。さて、多くの人が、最初この我らのイスパニアに文字をもたらしたのは誰か、あるいは我が国の人々が、どの地からそれを受けえたものか、という疑問を抱くのではなかろうか。現在では、信憑性ありとされているのは、ジュピターの息子のバックスとカドモの娘セメルとが文字をテーベから、とくにボイオティア<sup>54)</sup>の文字を伝えたということで、これはバックスが、トロイ戦争の前約二百年、イスパニアに来たときに当る。ところでこのバックスは、トロイ戦争で彼の友で仲間のリシアス<sup>55)</sup>を失なうが、このリシアスにちなんで、ドゥエロ河とグエディアナ河との間にある地方全域が、まずはリシタニア (Lisitania)、後にはルシタニア (Lusitania) と呼ばれたという。このリシアスは、ネブリサ<sup>56)</sup>、別名ベネリアと称された場所、即ち、プリニウスが『博物誌』第三巻に述べるところでは、ガダルキビール河の河口と潟との間にあったとされる町、に居を定めた。バックスはその地を、nebrides から出た名、ネブリサ (Nebrissa) で呼んだが、この単語は、彼らが犠牲に用いていた黄鹿の皮のことで、この犠牲の儀式は、シリウス・イタリクス<sup>57)</sup>がその著『第二ポエニ戦役』の第三巻でいうところでは、その地では、バックスにより取り仕切られていたらしい。したがって、権威ある人々の記録を信じていけば、イスパニアで私の生地<sup>58)</sup>の町ほどに由緒ある古を私に示しうる場所は、他にはない。というのは、サシント島<sup>58)</sup>や現在のモンビエドロで昔のサグント<sup>59)</sup>へのギリシア人の到来は、正しくこの時代であったか、それともボッコ<sup>60)</sup>の記述やプリニウスがその『博物史』第十六巻に述べるところに拠れば、この時代の直後であったか、のいずれかとなるからである。また別に、トロイ戦争の直前に、テーベの人アキレスが、詩人たちの想像に依れば、三つの頭を持っていたとかいうルシタニアの王ゲリュオン<sup>61)</sup>を攻めんとて来たときに、文字を持ち来たと考えられるし、あるいはトロイの陥落後ユリシーズが、今のリスボンがその名に因んで、オリシッポ (Olisipo) と呼ばれたことがあったが、この時代に、ユリシーズがもたらしたものとかが、アルバ<sup>62)</sup>の息子で、メノンの友でその戦車の御者であり、トロイの陥落後イスパニアに来て、アストゥリアス (Asturias) という名を残したアストゥール<sup>63)</sup>が、もたらしたものとかが、また同じ時代に、テラモン<sup>64)</sup>の息子で、現在のカルタヘナのあたりに到着し、その後ギリシアの統治に出向いたテウクロスだとか、パルナッソス山<sup>65)</sup>の住民にして、その名をカスタリア (Castalia) の泉から取った土地、カスロナ (Cazlona) に入植した人々だとか、他ならぬ文字の創始者で、カレス<sup>66)</sup>の町に入植したフェニキア人であって、『歴史通鑑』<sup>67)</sup>のいうようなヘラクレスやエスパン<sup>68)</sup>ではない、と

か、あるいは、イスパニアが長らくその統治下にあったカルタゴ人が、その後の時代に伝えたのだとか、諸説紛々としている。しかし私の思うところ、イスパニアはまずは他のどの国を描いても、ローマ人から文字を受け入れたことは疑い無きことであって、これローマ人がイスパニアの支配者となったとき、つまり、我らが救世主のご生誕の前約二百年のことである。というのは、もし仮に、上述の人々のうち誰かがイスパニアに文字をもたらしたとすれば、今日何らかの痕跡が、少なくとも、金貨や銀貨などが、ギリシア語やフェニキア語の文字を銘んだ石碑などが、見付かってしかるべきであるが、これは実際にはない。一方、現在我々は、ローマ文字による石碑などを有し、そこに、キリスト紀元前二百年から我らの救世主ご生誕後五百七十年まで、つまりゴート人がイスパニアを占領したときまでの期間に、イスパニアを支配、統治した多くの有名な人物の事蹟が盛られているのを、見る事が出来るのである。さて、このゴート人は、ローマの言語のラテン語、すでにそれまでの度重なる戦争のために衰微し始めていたこのことばを、完全に崩しただけではなしに、イスパニアがこれらゴート人の王の支配下にあった百二十年間に書かれた書物にも見られるように、ゴート人の文字をも持ち込み、元からあった文字と混ぜ合わせたりして、昔からの文字の形や姿を歪曲してしまった。この種の文字の形は、カスティリヤとレオンの執政官と王の時代以降引き続き用いられたが、後には徐々に我が国の文字も元のローマの文字にその形を一致させ始め、これが現在、我々の努力でもってほぼ達成の運びとなった。以上で、文字の創始とそれがどの地からこのイスパニアにもたらされたか、については十分であろう。

### 第三章 いかにして文字が声を表示するためのものとして用いられるに至ったかについて

文字創始の理由は、まずは我々の記憶の助けとするためであり、次いでは文字を介し、不在の者、生れ来るべき者と語り合わんがためであった。ここからも分かるように、文字の創始は文字が発見される前に、記憶に残したいと考えられた事柄を絵や形で表わしたということに端を発する。例えば、右手の形は寛大さを、とぐろを巻いた蛇は年を、意味したのである。しかし、このような方法を探ると際限がなくなり、実に紛らわしくもなるので、文字の最初の創始者は、それが誰であるにせよ、自分の言語にある声の種類の種類はいくつを見極め、それに等しい数の文字を作ったうえで、これをある一定の順序に配列し、必要な単語を書き表わしたのであった。したがって、文字は声を書き表わすための図形である。他方、声とは、肺に集められ、その後、気管と称される大管脈に押し込められ、そこから喉ひこ、舌、歯や唇などによって変化を加えられつつ吐き出されてくる息なのである。したがって、文字は声を表示し、声は、アリストテレスもいうように、人の心の中にある思想を意味している。しかし、この声は人間には生得のものではあるが、一部の言語には、他の国の人々がどんなに苦勞し努力してみても発音しえない、いくつかの声が存在する。これがためキンティリアノスは、岩登り人が若い時から、特殊な形での四肢の屈伸、屈曲の訓練をして、我々身体の固くなった者が出来ないような不思議な動作の数々を後々

に出来るようになるのと同じように、子供たちも、幼い時期に、将来用いるはずの文字の発音全部に慣れ親んでおくべきだ、といっているのである。我々の日常語で二重の l で書き表わしているものは、我々の言語独特の発音であるので、ユダヤ人、モーロ人、ギリシア人、ラテン人もそれを発音しえないばかりか、その音を書き表わすための文字の形さえをも持っていない。これと同じく、我々が x で書き表わすものは、モーロ人特有の発音で、彼らの話し方から我々が入れたものなので、この発音を、ユダヤ人、ギリシア人、ラテン人も自分たちに固有のものとしては認識していないのである。加うるに、ユダヤ人がそのアルファベットの第十九番目の文字として使っているものも、彼らの言語に独特の声であり、ギリシア人、ラテン人や私がこれまでに聴いた他のどのことばも、そういう発音を持たないし、自分たちの言語固有の文字としてもそれを用いることがないのである。このように、他の多くの発音でも夫々の言語に独特のものがあり、他の国の者がどんなに努力、精進しても、もしその発音に幼い時期から慣れ親しんでいなければ、明瞭に発音することは困難なものがある。

#### 第四章 ラテン語の文字と発音について

我々がキンティリアヌス<sup>69)</sup>はその著『弁論述教程』に於いて、ある言語を規範にまとめようとする者は、まず最初に、使用されている文字のうち何らかの余計なものがあるかどうか、またこれと反対に、何らかの足りないものがあるかどうかを知る必要がある、と述べている。また、我々が用いている文字は、ラテン語から取り入れられたものなので、まずは、ラテン語で用いられている文字はいくつか、ここで余計なもの足りないものがあるかどうかを調べれば、これによって、我々の考察すべき問題点は何かを容易に見極められることになる。まずは最初に、ラテン語の用いる二十三文字の形<sup>70)</sup> a, b, c, d, e, f, g, h, i, k, l, m, n, o, p, q, r, s, t, u, x, y, z のうち、c, k, q の三文字は一つの音を持つだけなので、このうちの二個は余計なものとなるが、私はこの余計なものをさし当りは、k と q とにしておきたい。また x も不必要だが、こういう理由は、これが cs の短縮形に他ならないからだということ、またギリシア語の y と z とはギリシア語の単語のみに用いられること、加うるに、h は文字ではなく、息と呼気との印であること、を挙げておこう。またこれと反対に、二個の母音が不足していることをも指摘したいが、これは他の箇所ですく論じた通りで、そのひとつは e と i との間の音を表わすもの、もうひとつは i と u との間の音を表わすものなのである<sup>71)</sup>。ここでいう二つの音は、ラテン語にもそれを示す文字の形がなかったので、我々も子供のときからその発音に慣れ親しむことがなく、今となっては、それを実際に発音してみることも、聴いて識別することも出来なくなってしまっているし、i イオータ<sup>72)</sup>と軽い y との間に差を付けることなど、なおおぼつかなくなっているが、事実この二者間には、二母音間にあるほどの差といえる程の大きな違いがある。また子音が二個不足しているが、これは i, u で表示するもので、独立した音を表わすのではなく、他の母音と合わさった音を示す場合である。するとこの場合には i と u ではなくなり、文字の形は同じでもその声の強さが違い、別の

ものになってくる。こういうのも二文字間の一番大きな差は、各文字が単独の音を表わすか、それとも他の文字と合わさって音を形成するか、の場合に生ずるからである。また c, k, q は同じ強さを持つので、ひとつの文字になるといっておいたが、これとは反対に、今度は、i と u とは四文字として、各文字に夫々二つの強さがある、といえる。従って、文字の違いはその形の違いによって生ずるのではなく、発音の違いに起因する訳で、プリニウスがその著『博物誌』第七巻で述べているように、ラテン人はギリシア語文字全部の強さを感知しその言語の中に取り入れているので、今度はラテン語に用いられている声の種類はいくつかを見てみよう。さて、ギリシア語文字全部といったが、ラテン語では二十六文字で、その内母音は a, e, i, o, u, ギリシア語の y, これに加え先にラテン語にはそれに当る文字がないといった例の母音の二個との計八個、子音は b, c, d, f, g, l, m, n, p, r, s, t, z, 子音として用いる場合の i と u, ギリシア語の単語に用いる息を伴う三子音の ch, ph, th の計十八個になる。従って全部ですでに挙げたように二十六種の発音、つまり、a, b, c, ch, d, e, f, g, i, 子音の i, l, m, n, o, p, ph, r, s, t, th, u, 子音の u, ギリシア語の y, z と、これに前述の二母音とである。前の八個を母音と呼んだが、これは他の文字と組み合わせずともそれ独自で声を持つからであり、他のものを子音と呼ぶのは母音と合わさった場合でないで声を作り出せないからである。この子音は十二個の無声音、即ち b, c, ch, d, f, g, p, ph, t, th, 子音の i と u と、六個の半母音、即ち l, m, n, r, s, z とに分けられる。前者を「無声音」と呼ぶのは、これらが母音に比べて殆んど何の音をも持たないからである。残りのものを「半母音」と呼ぶのは、「無声音」に比べて大きな響きを持つからである。この「響き」は、夫々の声が形成される場所の違いによって起ってくる。というのは、母音はそれ独自に音を生じ、子音が形成されるときに働く器官の何一つをも震動させる要もなく、ただ息を喉という狭いところを通過させるだけでよく、その母音の違いは口の形によって作り出される。無声音のうち c, ch, g は、喉の緊張、震動を加減することで生じるが、これは c が気音を除いた音となるのに、ch は声を伴わぬ、もっと緩んだ音となるし、g は c と比べると声を伴ったものになるが、ch に比べると軽くなるので、丁度両者の中間にあることになる<sup>73)</sup>。t, th, d の音は、舌の前部を歯の間に入れ、これの緊張や弛緩の度合を加減しつつ、声をおし出すことで生じる。ここで緊張、弛緩の度合を加減するというのは、t が気音を除いた音となるが、th は弛んだ、声を伴わぬ音で、d は th に比べると軽く、t に比べると弛んでいるので、丁度両者の中間の音になるからである。p, ph, b は、強弱の度合を付けて唇を閉じ合わせて後、声を押し出すことで出来る音である。ここで唇の閉じ合わせに強弱度合を付けてというのは、p は気音を除いた音であるが、ph は声を伴わぬ音となり、b は、ph に比べると軽く、p に比べると声を伴い重くなって、丁度両者の中間の音となるからである。m は p と同じ場所に生ずる音だが、内部の方に響くので、暗い響きになるが、これは特にプリニウスがいうように、語末において起る。f は子音の v と共に、上の歯を下の唇に当て、歯のすき間から息をはき出して出来る音で、f の方が外側に、v の方が少し内側になる。半母音は全部が、舌を口蓋にもたせかけて出来る音で、口蓋ではこの半母音が実に強い響きを出すことがあるので、

rを母音の中に入れてしまった人もある。またこの理由からすれば、我々は半母音の中に子音のiを組み入れてもいいだろう。ここからも、chを次にa, o, uがくるときのcのように発音する人が如何に大きな間違いをしているかが分かるし、またこの人たち、chにeとiが続くときにカスティリア語ではどんなに間違った発音をすることになるかも分かるし、thをtのように、phをfのように、tにiが続きそれに他の母音が続くときにこのtをcのように発音するのも間違いだ、と分かるのである。またこれとは逆に、cとgとをa, o, uが続く時とe, iが続くときとで夫々別に発音する人たちも間違っていることになり、他の箇所でも十分に説明はするが、この場合に、ギリシア語のiをラテン語のiのように発音する人も間違っていることになるのである。

## 第五章 カスティリア語の文字と発音について

前章で我々がラテン語の文字についていったことをカスティリア語についてもいうことが出来る。つまり、カスティリア語を書き表わすためラテン語から借用した二十三個の文字の形のうち、それ独自の働きにのみ用いられるのは、a, b, d, e, f, m, o, p, r, s, t, zの十二個であり、それ独自の働きに加えて他の働きをもするのは、c, g, i, l, n, uの六個、付加的な働きのみで独自の働きをしないのがh, q, k, x, yの五個である。これらの事柄をより明確に説明するために、我々は、正書法について論述する人みなが、あらかじめ前提にしていることを、ここでも再確認しておきたい。まずは、発音するがままに書き表わし、書き表わすがままに発音しなければならない、ということがあるが、こうしないことには文字が出来たことも無駄になってしまうからである。第二には、文字とは、声と発音とを表現するための形に他ならないこと、第三には、文字の違いは形の違いとして在るのではなく、発音の違いとして在る、ということである。従って、我々の言語にある声の総数を数えて判別してみると、また二十六個ということになるが、これは私たちがラテン語の場合に見たのと全部が同じではないので、これらを正しくしかも明瞭に文字として書き表わそうとすれば、どうしても他の二十六個の文字の形がいることになるのである。これは、明らかで十分な帰納によって、次のようにして証明される。即ち、先にそれ独自の働きにのみ用いられるといった十二文字は、私たちカスティリア人が夫々に充当した声を表示していること、疑を容れない。kとqとは何の役割をも果していないことは、前章で述べたこと、つまり、c, k, qは同じ一つの働きしかしていないので、したがってこの内二つは無用であるということからも立証される。という訳は、kは今や廃されてしまっていることは誰にも明らかで、それに代って、キンティリアヌスもいっているように、cが現われ、これが等しくその力をそれに続く母音全部に及ぼしたからである。qは稀にしか用いないが、これは今日qで書き表わしているものはみな、cで書き表わそうと思えば可能なことであるし、特にこの代替は、私たちが今そのcに与えているような多くの役割を減らしたとすれば、ずっと容易に実現することだろう。ギリシア語のyもまた何の用をなしているか、私には分からないが、こういうのはラテン語のi以外の強さをも音をも表わさないからである。但し、iが母音か子音かの点で紛らわしくなるような箇所にこれを使う場合は別

で、例えば, *raya*, *ayo*, *yunta* と書いてあるところにラテン語の *i* を使って, *raia*, *aio*, *iunta*<sup>74)</sup> としたら, 全く別のことをいうことになるからである. 従って, 二十三個の文字の形のうち八個のみが残ることになり, 私たちはこの八個の役割を拡大して, 十四の発音を書き表わしているのである. まず *c* には三つの役割がある. その一つはそれ本来のもので, *cabra*, *coraçón*, *cuero* の最初の文字にみられるように, *c* に *a*, *o*, *u* が続く場合である. 他に二つの付加的な役割があり, その一つは *çarça*, *çevada* の最初の文字にみられるように, 私たちがいつも *c* の下にセディリアと呼ぶ小記号を付けて使う場合で, この発音はユダヤ人とモーロ人に特有のものであって, 私の考えでは我々の言語が彼らからそれを受け入れたものと思われる. というのは, 正しい発音をするギリシア人やラテン人もその発音を自分たちのものとして感知, 認識していないからである. 従って, 発音の上では何の価値もないこの印を下に付けた *c* は, *c* ではなく全然別の文字となるが, これは元々それを使っているユダヤ人やモーロ人も, 別の文字を持っている場合であって, 我々は彼らから音の強さを受け入れはしたが, 彼らの用いる文字の形を受け入れなかったのである. *c* に付加されたもうひとつの役割は, その次に *h* がきて, その発音は *chapín*, *chico* のような語の最初の文字に現われる場合であり, これこそ我々の言語に固有のもので, ユダヤ人, ギリシア人, ラテン人もこの発音を自分のものとしては認識していない. 我々はこれを *ch* と書くが, この二文字は, 前章でも述べたように, 我々が個々の文字に与えているのとは全く違った音を表わすのである. *g* も二つの役割を持っている. ひとつはそれ固有のもので, それに *a*, *o*, *u* が続くときに出来る音の場合であり, もうひとつは付加的で, それに *e*, *i* が続く場合である. 両者は *gallo*, *gente*, *girón*, *gota*, *gula* のような語の第一文字に当たるが, 中でも *e*, *i* と共に現われる場合が我々の言語に特有の音となり<sup>75)</sup>, ユダヤ人もギリシア人もラテン人も, この音を自分たちのものとして感知, 認識しえないのである. 但しモーロ人だけは別で, 私は, 我々が彼らの言語からこれを取り入れたものと考えている. *h* は, 我々の言語では, それ独自には何の用をもなさないが, 我々はそれを, *hago*, *hecho* といった単語の第一文字で発音するような音を示すのに用いている. この文字は, ラテン語では文字としての力を持たないとはいえ, 確かなところ, 我々はそれを喉をこすって発音しているので, 文字の数の中に入れて数えていいと思うが, これは, 我々がそれを受け入れた大本のユダヤ人やモーロ人が, 私の考えるところ, それを文字として扱っているのと同じことになるのである. *i* も二つの役割を持つ. 一つはそれ本来のもので, *ira*, *igual* のような単語の第一文字として, 母音として使う場合である. もう一つは *g* と共通の役割をなす場合だが, こういうのは, これを子音として使うときには, *a*, *o*, *u* が続いてくれば *i* を書き<sup>76)</sup>, *e*, *i* がくれば *g* を書いているからである. この発音は, *g* のときにいったように, 我々とモーロ人とに独特のもので, このモーロ人から我々はそれを受け入れたのかもしれない. *l* は二つの役割を持つ. 一つはそれ本来のもので, それを一つだけ使って, *lado*, *luna* のような語の第一文字のようにする場合である. もう一つは本来的なものでなく, 二個重ねて書いて, *llave*, *lleno* といった語の第一文字に出てくるような発音をそれに当てる場合である. この声は, ユダヤ人, モ

一ロ人、ギリシア人、ラテン人の誰もが、自分たちのものとしては認識してはいない。我々はこの文字を、完全に正書法の原則に反して書いているが、こういうのは、どんな言語といえ、同じ文字が二個重なってこれが同時に一母音に合一することは認めていないし、またこの二重になった文字が固く組み合わせさせてその発音を作り出し、結果として我々がそこに当てている発音を、その文字で表出しようになっているか、というともなっていないからである。n も同様に二つの役割を持つ。一つはそれ本来のもので、それを一個書いて、nave, nombre といった語の最初の文字に出来るような音を示す場合である。もう一つはそれに固有のものではなく、ñudo, ñublado といった語の最初の文字、año, señor などの二番目の文字に出来るような音を示すものとして、それを二つ重ねて書くか、それともその上に波形符号を付して書くか、のいずれかで使う場合である。特にこの符号を付加出来るのは、先に見た二重の l の場合だけであって、n の場合これを文字として書く場合は別であるが、これ以外では私たちが好き勝手に n の上に波形符号は使ってはいけない。だから、この波形符号付きの n は、他のアルファベットの文字に併せてアルファベットの一文字としておかないと、それに対し不当な扱いをすることになるのである。i の場合にも触れたが、u にも二つの役割がある。その一つはそれ固有のもので、単独で母音としての音を成し、uno, uso のような単語の最初の音となる場合である。もう一つは、付け足しのもので、母音に合わさるときで、その音は、valle, vengo などの語の最初の文字に出来る場合である。古代の文法学者は、この文字の代りにイオリコ語のディガムマ<sup>77)</sup>を書いたが、これはカスティリア語の f と似た形をし、音の点でもそれからあまり離れてはいなかった。しかし、f がギリシア語の ph の代りに現われるようになってからは、u を借りてきてこれをイオリコ語のディガムマの代りに使ったのである。x については、ラテン語ではどんな音であるか、またこれは他でもない cs の短縮形である、ということはすでに先に述べた。私たちはこの文字に、xena-be, xabón といった語の最初の文字、relox, balax といった語の最終の文字に現われるような発音を当てているが、これは x の本来の性質に反することになる。というのは、この発音は、既に述べたように、アラビア語独特のものだからであって<sup>78)</sup>、アラビア語から我々の言語に入ったものと思えるのである。従って、これまで述べてきたことから、我々が証明せんとしたことが明らかとなり結論付けられる。即ち、カスティリア語には二十六の異った発音があること、ラテン語から借り入れた二十三文字のうち十二のみが、ラテン語から随伴し持ち来った十二の発音を表わすために用いられていること、その他の文字は何ら正書法上の正当な理由なしに使われていること、の三点である。(続く)

1985年6月

#### (註 記)

この翻訳の冒頭には、紙数の関係で『カスティリア語文法』の目次の大項目のみを挙げ、箇々の巻目の細部項目は割愛した。完全な目次は、本文法書全巻を訳出したときに、その末尾に記載する予定である。

なお、ちなみに、第一巻(正書法を取り扱うの巻)の細部項目は、以下のようにになっている。



LIBRO PRIMERO. En que trata dela orthographia.

§I en que parte la Grammatica en partes, 12; §II dela primera invencion delas letras i de donde vinieron primero a nuestra España, 13; §III de como las letras fueron halladas para representar las bozes, 17; §IV delas letras i pronunciaciones dela lengua latina, 18; §V delas letras i pronunciaciones dela lengua castellana, 21; §VI del remedio que se puede tener para escribir pura mente el castellano, 24; §VII del parentesco i vezindad que las letras entre si tienen, 26; §VIII dela orden delas vocales quando se cogen en diphthongo, 29; §IX dela orden delas consonantes entre si, 31; §X en que pone reglas generales del orthographia del castellano. 34. (P. Galindo Romeo y L. Ortiz Muñoz 校訂本, pág. 3; 数字は当該ページを示す).

この註記作成にあたっては、本文訳出に用いた Antonio Quilis 校訂本 (1980) の他に、P. Galindo Romeo y L. Ortiz Muñoz 校訂本 (1946) 中の註をも参考とした。特に、固有名詞の場合、現代語のものと違った表記になっているものは、現代語の形をも挙げておいた。なお、原。は訳出テキスト原典 (Antonio Quilis 校訂本) の形を、lat. はラテン語での当該の形を示す。

- 1) シシオン人 (sicionios) : ペロポネソス半島北部にあった古代ギリシアの都市, Sición, Sicione の住民。
- 2) アブラハム (Abraham) : 有名なユダヤ人の族長。ユダヤ人の先祖として、創世紀に現われる。
- 3) カルデア人 (caldeos) : 紀元前11世紀にバビロニアに住んだ、アラム語を話したセム族の一派。
- 4) モーゼ (原. Moisés, Moisés) : ユダヤの建国者、立法者として有名。
- 5) ソロモン王 (Salomón) : 紀元前10世紀のイスラエルの賢王。ダビデ (David) の子。
- 6) オルペウス (Orfeo) : ギリシア神話の人物、無生物をも感動させた竖琴の名手といわれる。
- 7) リノス (Lino) : ギリシア神話の人物、音楽家、詩人で、施律、リズムの創始者。
- 8) ムサイオス (Museo) : オルペウスの時代のギリシアにおける伝説的詩人。
- 9) アムピオン (Amphión) : ギリシア神話の人物。ゼウスの子で竖琴を弾いて石を動かし、テーベの城壁を築いたといわれる。
- 10) ホメロス (原: Omero, Homero) : 古代ギリシアの詩聖。
- 11) ヘシオドス (原. Esiodo, Hesíodo) : 紀元前8世紀頃のギリシアの詩人。
- 12) リビウス・アンドロニクス (原. Livio Andrónico; lat. Livius Andronicus) : ローマ最初の悲劇詩人で、紀元前240年頃の人。
- 13) アウグスト大帝。アウグストゥス・オクタウィヌス・カエサル (原. Augusto César; lat. Augustus Octavius Caesar : 63 a. C.-14 d. C.) のこと。
- 14) テキスト (pág. 98) では el Apóstol (使徒) となっている。なお、この部分は聖書の文言が比較的自由に引用されている。
- 15) トゥリウス (原. Tulio, Marco Tulio; lat. Marcus Tullius Cicero). かの有名な政治家で弁論家のキケロ。
- 16) ルクレティウス (原. Lucrecio; lat. Titus Lucretius, c. 95-c. 55 a. C.). ローマの詩人。哲学者。
- 17) ベルギリウス (原. Virgilio; lat. Publius Vergilius Maro, 70-19 a. C.). ローマの詩人。
- 18) ホラティウス (原. Oracio, Horacio; lat. Quintus Horatius Flaccus, 65-8 a. C.). ローマの詩人。
- 19) オビディウス (原. Ovidio; lat. P. Ovidius Naso, 43 a. C.-17 d. C.). ローマの詩人。
- 20) リビウス (原. Livio; lat. T. Livius Patavinus, 59 a. C.-17 d. C.). 有名なローマの歴史家。
- 21) アントニヌス・ピウス (原. Antonino Pio; lat. Antoninus Pius). ローマ五賢帝の一人 (86-161).
- 22) アルフォロソ賢王 (Alfonso el Sabio) : カスティーリア語散文確立のためにつくしたカスティーリア国王 (1252-1284在位)。
- 23) ここでは名詞 *artificio* が使われ, “reducir en artificio este nuestro lenguaje castellano” (テキスト pág. 100) となっている。

- 24) ゼノドトス (原. Zenodoto, Zenodoto de Efeso) : 紀元前3世紀のギリシアの詩人で文法家.
- 25) クラテス (原. Crates, Crates de Males) : 紀元前2世紀のギリシアの文法家のことか.
- 26) 『文法技法』: ここでは “Arte de la Gramática” という表現が使われている (テキスト pág. 101).
- 27) Fray Hernando de Talavera (1428-1507) のことで、時の女王 Isabel la Católica の聴罪師でもあった高僧.
- 28) マルクス・ヴァロ (原. Marco Varrón; lat. Marcus Terentius Varro, 116-27 a. C.) : ローマ最大の学者, その著述は多方面に亘っている.
- 29) マルクス・トゥリウス. 註15) 参照のこと.
- 30) グリリウス (原. Grilo; lat. Grillius, Gryllius) : 4世紀末の文法学者.
- 31) 聖ジェローム (原. sant Jerónimo; lat. L. Eusebius Hieronymus, c. 347-c. 420) : カトリック教会の学僧で, 聖書のラテン語訳を完成した人. 本文の記述では “法王ダマソが聖ジェロームにその著作を献呈し…” となっているが (テキスト pág. 102), 事実とは逆で, 聖ジェロームが, 新訳聖書のラテン語訳を法王ダマソ一世(Damaso I, 366-384) に奉げている.
- 32) パウルス・オロシウス (原. Paulo Orosio; lat. Paulus Orosius) : 5世紀初頭の神学者, 歴史家. その著, *Historiarum adversus paganos libri VII* が有名.
- 33) 聖アウグスティヌス (原. sant Agustín, san Agustín; lat. Augustinus, 354-430) : 初期キリスト教最大の教父で, ヒッポの司教.
- 34) *letrado* : ラテン語で *litteratus* (文字に詳しい) を語源とする語で, Nebrija は, *gramático* の語源的意味を説明するため, この *letrado* (=docto en la ciencia de letras) を用いたと思われる.
- 35) *doctrinal* : ラテン語 *doctrinalis* (規則をまとめた本) を語源とする語で, やはり Nebrija は *methódica* の基本的な意味を, この単語で説明しようとしている.
- 36) *declaradora* : *declarar* (言明する; 数え上げる) という意味の動詞から派生した語であり, その意味するところは, 本文の記述にも明らかなように, 過去の文献, 学説の紹介, 解説, 批判を行なうこと, と考えられる.
- 37) *anotación* : これは *anotación al origen y sentido de la palabra* (単語の起源と意味についての註釈), と解釈できるだろう.
- 38) ヘリウス (原. Gelio; lat. Aulus Gellius) : 2世紀前半のローマの文法学者.
- 39) メルクリウス (原. Mercurio; lat. Mercurius) : ローマ神話の神, 神々の使神.
- 40) アンティクリデス (Anticlides) : ギリシアの歴史家で, アレキサンダー大王の時代にアテネに生れたとされる.
- 41) メノン (Menón) : ギリシア神話の女神エオスとティトノスの子で, エチオピアに生れたメムノンのことか.
- 42) フォロネオ (Foroneo) : ギリシア神話上の人物で. アルゴスの王.
- 43) エピヘネス (Epigenes) : 紀元前6世紀のギリシアの作家.
- 44) クリトデモ (Critodemo) : 紀元前4世紀のギリシアの歴史家.
- 45) ベロソ (Beroso) : カルデア人宗教家で, ギリシア語によりバビロニアの歴史を著した.
- 46) ホアン・デ・メナ (Juan de Mena, 1414-1456) : コルドバ生まれで, 15世紀有数の古典語学者であり, 超教養主義派の詩人. ここではその作品のひとつ, *Laberinto de fortuna* の中の *copla* 209 : 《Porque maldigo a vos, mallorqueses/vos que las fondas fallastes primero—マジョルカの住民よ, 私があなた方を悪しざまにいうのは, あなた方がまず最初に石投げ縄の使い方を創案したため》, という一節に言及しているのであろう.
- 47) ヤコブ (Jacob) : Abraham の孫で, イスラエル十二支族の祖の父.
- 48) ヘロドトス (原. Eródoto, Herodoto; lat. Herodotus, c. 484-c. 425 a. C.) : ギリシアの歴史家, 「歴史の

父」と称されている。

- 49) ポンポニウス・メラ (原. Pomponio Mela; lat. Pomponius Mela): 1世紀のローマの地理学者。
- 50) カナンの地: パレスティナの西部で、神がアブラハムとその子孫に約束した土地。
- 51) ラバン (Laban): 聖書の人物、ヤコブの妻はこのラバンの娘。
- 52) カドモ (Cadmō): 神話の人物で、アゲノール (Agenor) の息子で、ゼウスに連れ去られた妹、エウローペ (Europa) を捜し求めて旅に出た人。
- 53) カルメンティス (原. Carmenta; lat. Carmentis): ローマの女神、ローマのパラティヌスの丘の麓にパランテウムの町を建設したエバンドロ (Evander, lat. Evandro) の母。
- 54) ボイオティア (Boecia; lat. Boeotia): 中部ギリシアの都市国家連邦で、その首都はテーベにあった。
- 55) リシアス (Lisias, c. 445-c. 380 a. C.): アッティカの弁論家。
- 56) ネブリサ (Nebrissa): 現在の Sevilla 県、レブリハ (Lebrija) の町の古称。ローマ時代には Nebrissa Veneria と呼ばれていた。なお、この文法書の著者は本名を Antonio Martínez de Cala y Jarava というが、この生地の名を取って、Elio Antonio de Nebrija と称していた。
- 57) シリウス・イタリクス (原. Silius Italicus; lat. Silius Italicus, c. 25-101): ローマの叙情詩人で、ベルギリウスの熱烈な賛美者であったといわれる。
- 58) サシント (Zacinto) 島: ギリシア、エーゲ海にある島。
- 59) サグント (Sagunto): イスパニア、バレンシア地方にある町で、ビシゴート時代から1868年まで、Murviedro と呼ばれていた。
- 60) ボッコ (原. Bocco; lat. Cornelius Bocchus): クラウディウス帝 (41-53) の時代のローマの歴史家。
- 61) ゲリュオン (Geriones): ヘラクレス第十番目の難事の相手で、三頭の怪物。
- 62) アルバ (Alva): (?)
- 63) アストゥール (Astur): (?)
- 64) テラモン (Telamón): ペレウスの兄弟で、アキレスの伯父。本文にもあるようにテウクロス (Teucro) の父。
- 65) パルナッソス (原. Parnasso; lat. Parnassus) 山: 英雄パルナッソスとその麓に神託所を開いたギリシア中部の山で、アポロとミューズの霊地。
- 66) カレス (Calez) の町。現在のカディス (Cádiz) のこと。
- 67) 『歴史通鑑』(General Istoria): アルフォンソ十世賢王が編纂したとされる大世界史。
- 68) エスパン (Espán): 同じくアルフォンソ賢王の編纂したとされる『イスパニア大国史』(Primera Crónica General de España), 第三章以降に、エスパンやヘラクレス (原. Ercules, Hércules; lat. Hercules) についての記述が多い。
- 69) キンティリアヌス (原. Quintiliano; lat. Quintilianus, c. 35-95) は、Nebrija にとって偉大な先達であっただけではなく、ローマ時代のイスパニアに生れた人でもあったので、ここでの“我らがキンティリアヌス-nuestro Quintiliano”という表現は、歴史的な意味を持つとも思われる。
- 70) figuras de letras (テキスト, pág. 113).
- 71) ラテン語の母音については, heri の e は e と i との中間音であり, opimum の i は i と u との中間音である (Medius est quidam i et u litterae sonus: neque enim sic opimum dicimus ut opimum; et heri neque e plane neque i auditur) といった考え方が、キンティリアノスなどにあったと思われる (Antonio de Nebrija, Gramática castellana, ed. critica de P. Galindo Romeo y L. Ortiz Muñoz, pág. 226, nota 7).
- 72) la i iota la y sutil (テキスト, pág. 113). ここでいう“イオータの i”とは、近代イスパニア語の j (=xota) に当たる。
- 73) この部分テキスト (pág. 114) では、《…la c suena limpia de aspiración; la ch, espessa z más floxa; la g, en media manera, porque comparada a la c es gruessa, comparada a la ch es sutil.》となって

いる。ラテン語は帯気子音を用いなかったで、ギリシア語源の帯気子音を表わす場合には  $\theta$  に代え  $th$ ,  $\phi$  に代え  $ph$  を用いた。この帯気子音の概念が Nebrija にも受け継がれ,  $c/k/\begin{cases} ch/k/ \\ g/g/ \end{cases}$  という相関の束が設定された, と考えられる。espesso (濃い, 厚い) は一般に, *traviesso* の  $-ss-$  で表わされるような“無声音”を, *grueso* (太い, 鈍い) は *casa* の  $-s-$  で表わされるような“有声音”を, 夫々意味するために用いられた語である。Nebrija はまた, 各子音の緊張度にも注目し, 帯気性のない子音のうち無声音を *apretado* (縮った) とし, 有声音を *en media manera* (中間状態にある) とし, 帯気子音を *flojo* (弛んだ), と分類している。また, 有声非常気音  $g$  と無声帯気音  $ch$  との間の聴覚印象にもとずき, 前者は後者よりも *sotil* (軽い, 柔らかい) と規定したのであろう。

- 74) Nebrija は  $y$  を常に母音として, ラテン語の  $i$  ( $=i$ ) と同じ働きをすべきもの, と見做している。但し, *rayo*, *ayo*, *yunta* のように, 硬口蓋摩擦音  $[y]$  を表示する場合は別で, ここでは, *raia*, *aio*, *iunta* と対立させて用いるべきだ, といっている (テキスト, *pág.* 117 参照)。
- 75) 子音  $[z]$  を表わす場合である。
- 76) *raia*, *aio*, *iunta* の  $i$  は註74)にも述べたように,  $[y]$  と対立するもうひとつの硬口摩擦音  $[z]$  を表わした。
- 77) *el digama eólico* (テキスト, *pág.* 118): ラテン語がアイオリス方言のディガムマ ( $F$ ) —最古のギリシア語アルファベットの一文字で  $[w]$  の音を表わした—を, 無声摩擦音  $F$  (*focus*) を表わすのに利用したことをいう。
- 78) Nebrija の権威をことごとく否定した Juan de Valdés も, この点では Nebrija と考えを同じくし, “...y si me parece [los vocablos en cuestión] son tomados del arávido, escrivolos con  $x$ , y assí digo *cax-cavel*, *cáxcara*, *taxbique*, etc., porque o son arávigos o tienen parte dello, es muy anexa la  $x$ .” (Juan de Valdés, *Diálogo de la lengua*, Clásicos Castellanos, No. 86, *pág.* 90) といっている。